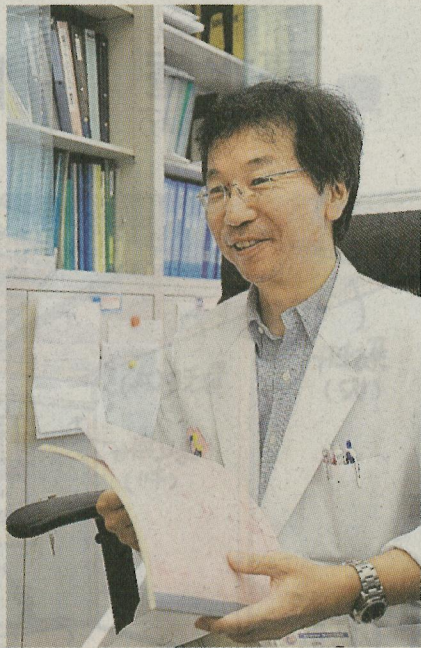


# 香川小児病院臨床研究部長・横田一郎氏

## 香川の医療 最前線

⑨



食生活の乱れや運動不足が原因で、大人と同じように糖尿病になる子どもが増えている。一度かかると、一生つきあつことを余儀なくされる糖尿病。それだけに幼い時期の発症は、負担が大きい。小児糖尿病治療の第一人者で、県内小児科で唯一、糖尿病指導医の認定を受ける香川小児病院臨床研究部長の横田一郎医師に、子どもの糖尿病をめぐ

子どもの肥満傾向などからみて、膵臓細胞が壊されるタイプと同程度まで増えているのではないかと。香川小児病院でも、治療を受ける子どもの約3割が生活習慣に起因するタイプ。

### 小児糖尿病

動きが悪くなって、血糖値が下がらず、糖尿病になる。――自覚症状はあるのか。――自覚症状が出るほど血糖値が上がる前に、学校などで検尿検査を受けて初めて血糖値が高いと分かり、糖尿病と判明するケースが多い。

### 生活習慣に起因の2型増加

## 適度な運動と食事大切

――子どもの糖尿病患者が増えているという。

因するタイプ。その比率は年々高くなっている。

――どんな治療をするのか。

これまで子どもの糖尿病といえば、血糖値を下げるインスリンを分泌する膵臓の細胞が壊されて発症する、1型と呼ばれるタイプが主だった。近年では、原因がまったく異なり、生活習慣に起因する2型と呼ばれるタイプが増えてきた。正確なデータはないが、子

――生活習慣に起因するタイプの患者増加の要因は。やはり、大人と同様、生活習慣の乱れによって子どもが肥満傾向にあることだ。子どものまわりには、スナック菓子やファストフード、ゲームと、肥満につながる危険因子が多い。肥満になると、インスリンの

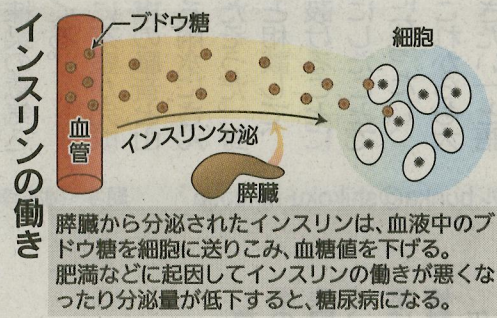
まず、頭に入れてほしいのは、糖尿病はコントロールする病気ということ。それは子どもも同じ。治療は、バランスのよい食習慣に変えるよう栄養指導をしたり、積極的な運動を促すなど生活習慣の改善に努力してもらうことが第一。糖尿病は自己管理が重要な疾患

●よこた・いちろう 1983年徳島大医学部卒。徳島香川県内や米国の病院で勤務した後、徳島大医学部・歯学部付属病院小児科講師を経て、2006年から香川小児病院臨床研究部長。日本糖尿病学会指導医、日本内分泌学会指導医、日本小児科学会専門医。徳島市出身。52歳。

かっければ、早めに治療を受けることが大事だ。――注意が必要な子どもは。肥満が一番の判断基準であることは間違いない。実際、患者の8割は肥満だ。ただ、太っていないなくても糖尿病になる子もいる。肥満度にかかわらず、偏食や運動不足の子どもは気をつけたい。また、糖尿病には遺伝的要素もあるので、家族が糖尿病の場合も注意が必要だ。

――適切な治療を受けず、放置するとどうなる。血糖値が高い状態が続くと、眼底出血を起こす網膜症や腎臓障害などの合併症を引き起こす可能性がある。血糖値が高いことが分

――子どもが糖尿病にならない予防法は。食事は栄養バランスを考え、適切な摂取カロリーにすること。適度な運動も必要。過度な肥満は糖尿病だけだけでなく、さまざまな疾患の原因になる。「肥満へらい」と軽視するのはよくない。幼少期から適度な運動をする習慣や太らない食生活を確立することは生涯の健康のためにも一番だ。



**香川小児病院**  
小児糖尿病の治療を受ける患者は、年間約40人。小児科のうち、横田医師ら内分泌専門の3人体制で治療に当たっている。  
所在地：善通寺市善通寺町2603  
電話：0877 (62) 0885  
<http://www.hosp.go.jp/~kagawasy/>